

## 尾市第1号古墳の調査をめぐって～新市町の最近の発掘調査の成果から～

- 1 矢立遺跡
- 2 金名の郷頭
- 3 尾市第1号古墳

### 金名の郷頭

江戸時代中期に造られた堰と橋の機能を兼ね備えた石造構築物。

金名川の水流通節のため、急な流れが方向を変える地点に位置し、1840年(天保11年)、豪雨で上流の切池が決壊したときの大水を郷頭でくいとめた、との伝承が残る。

橋としては、1900年代の半ばまで府中本山と常金丸を結ぶ往還(交通路)として利用され、上部は嵩上げされている。

石積みは打ち込み剥ぎ・谷積み技法が用いられ、導水(トンネル)部は古墳の横穴式石室と同じ持ち送り技法が使われており、上流に向かって張り出すアーチ式ダムとなっている。本体の強度を増すために、上流から下流まで栗石を敷き固めた上に、直径30～60cm程度の平石を敷いて川床としている。

地域の先人が、固有の技法で築造した近世治水技術を示す文化遺産であるとともに、自然と人為が調和した景観として保存・整備することが望まれます。

〈名称について〉

地域で言い伝えられてきた「ごうとう」の呼び名に、村の入り口の意味で「郷頭」の字が当てられた。他に「郷戸」の字が使われる例もある。



福山市新市町常  
やだち  
矢立遺跡の発掘調査について

福山市あしな文化財センター  
内田 実

調査原因 一般県道金丸府中線単県道路改良工事  
調査対象面積 830 m<sup>2</sup>  
調査期間 2007年2月13日～3月31日  
2007年4月19日～9月30日

本遺跡の調査は、大地2号遺跡に続く県道金丸府中線改良工事に伴う発掘調査で、掘立柱建物跡1棟、炉跡14ヶ所、土器溜まり1ヶ所（弥生時代）、土坑などの遺構が確認されました。

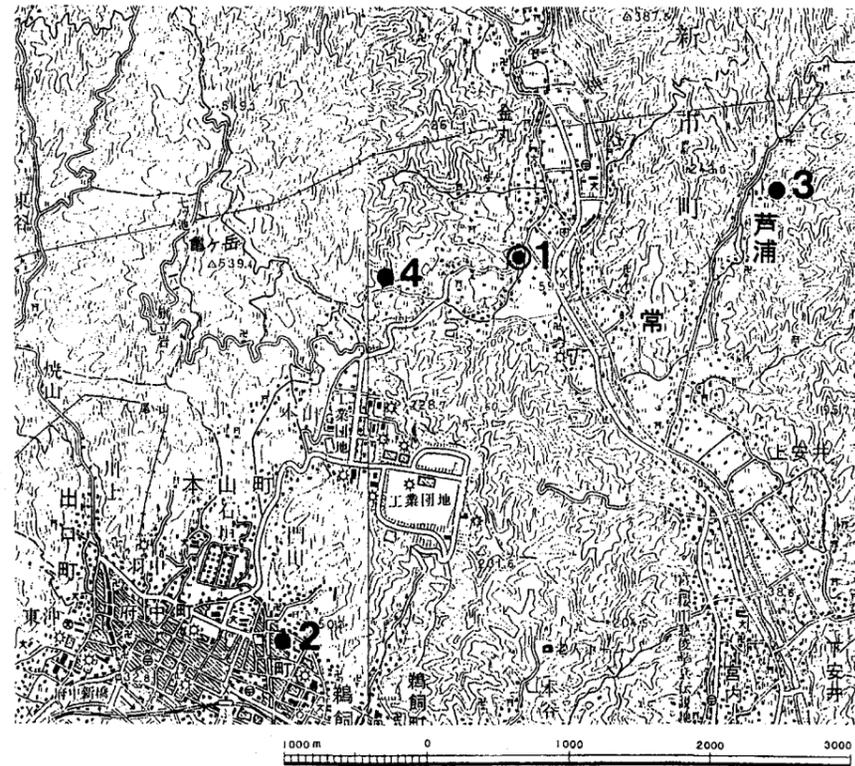
炉跡のうち、少なくとも9ヶ所は鉄製品を作る鍛冶炉とみられ、とくに直線上に7ヶ所の炉跡が並ぶSX2a～SX2gは、「官営鍛冶工房」と呼ばれる遺構の形態を示しています。この遺構は広島県内では初の検出例であり、周辺から出土した土器から、奈良時代から平安時代（8世紀～9世紀）の遺構と推定されますが、年代については検討中です。

鍛冶関連の遺物としては、鋤先・刀子の一部などの鉄製品、鉄滓（鉄の材料から分離された不純物）、金床石、砥石などが出土しました。

そのほか、弥生土器・土師器・須恵器などの土器類、管玉1点（弥生時代）、土錘（漁撈用の投網のおもり）100点以上が出土しています。

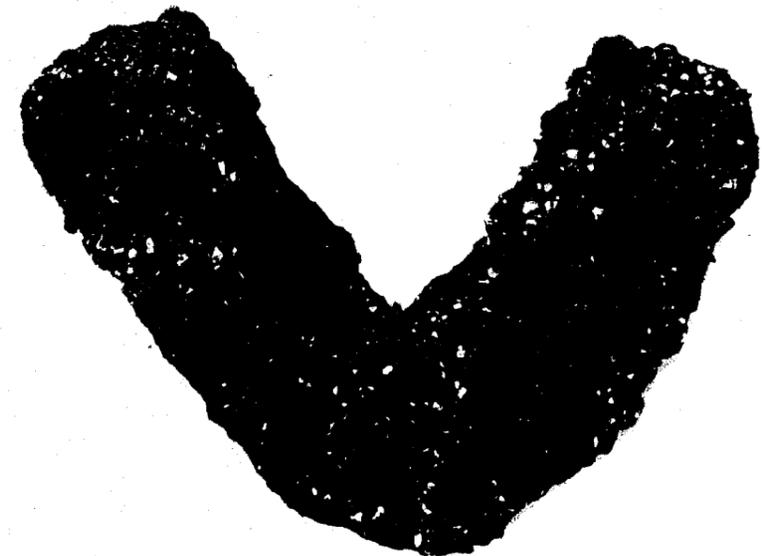
矢立遺跡周辺の遺物出土地点

- ①内黒1号    ②内黒2号    ③浜1号
- ④浜2号    ⑤土生田2号 ⑥大地1号
- ⑦矢倉田    ⑧土生田1号 ⑨宮脇遺跡

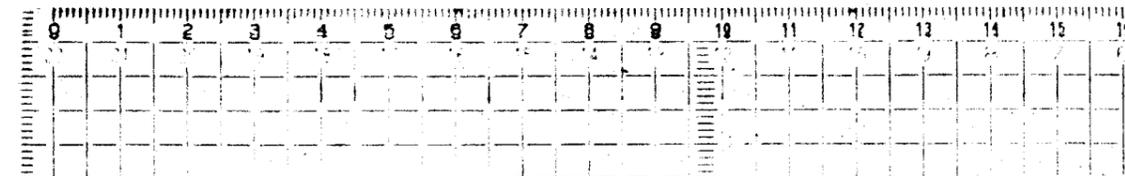


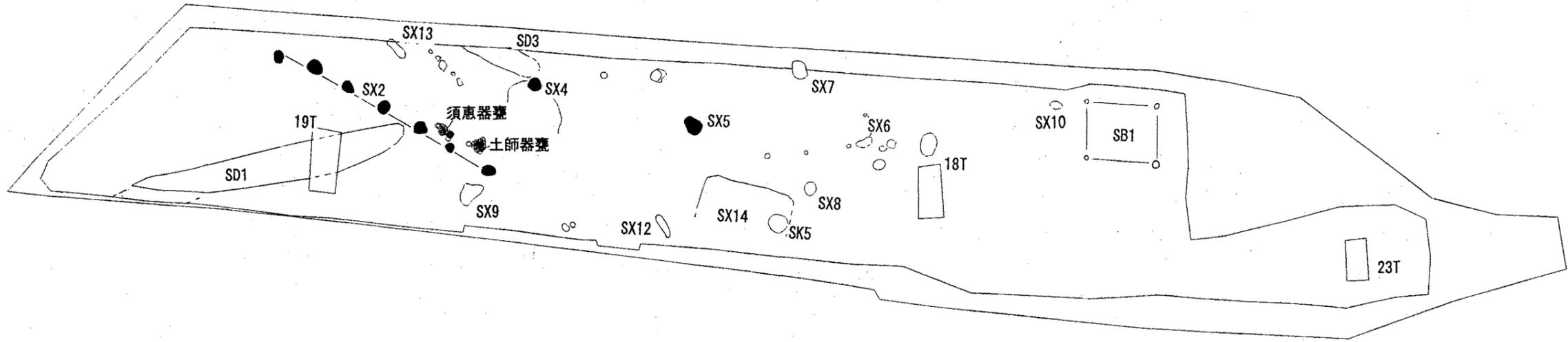
- 1 矢立遺跡            2 備後国府推定地
- 3 尾市第1号古墳    4 権現古墳群

- 和名類聚抄
- 品治郡
- 品治郡 品治
- 佐田郡 佐味
- 品治郡 狩道
- 品治郡 都瀬
- 品治郡 葦田
- 品治郡 駅家
- 品治郡 石茂
- 品治郡 神田
- 品治郡 服織



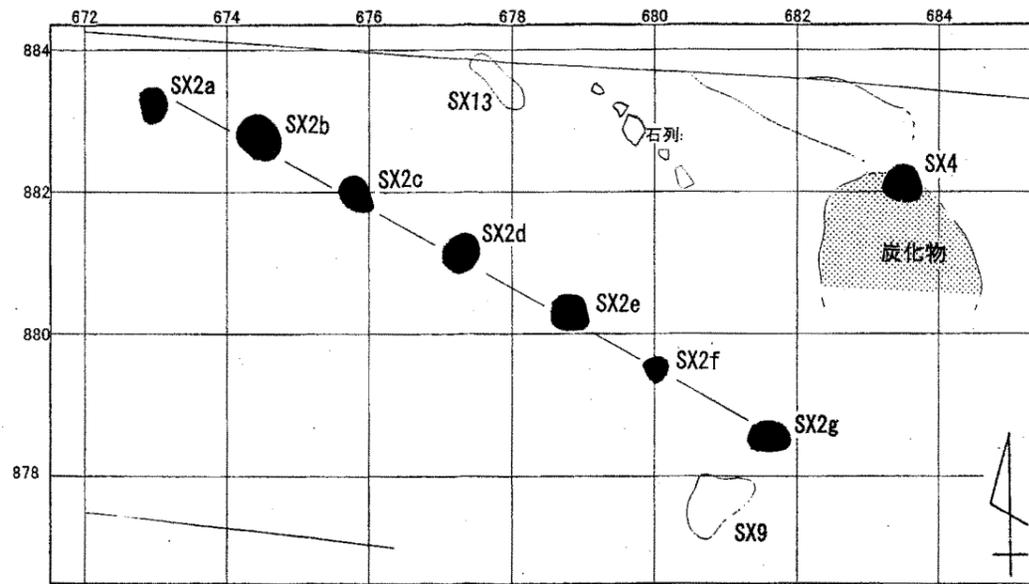
SX9 付近出土鉄製品



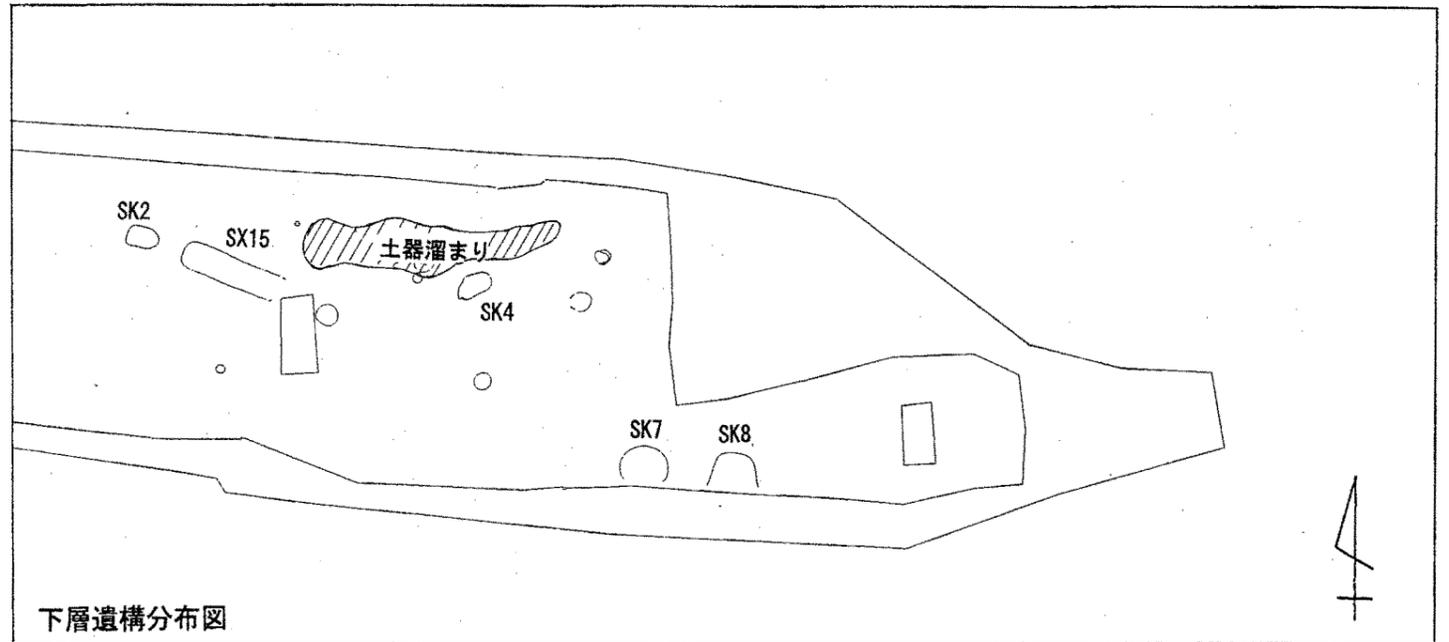


上層遺構分布図

縮尺1/200



縮尺1/100 SX2拡大図

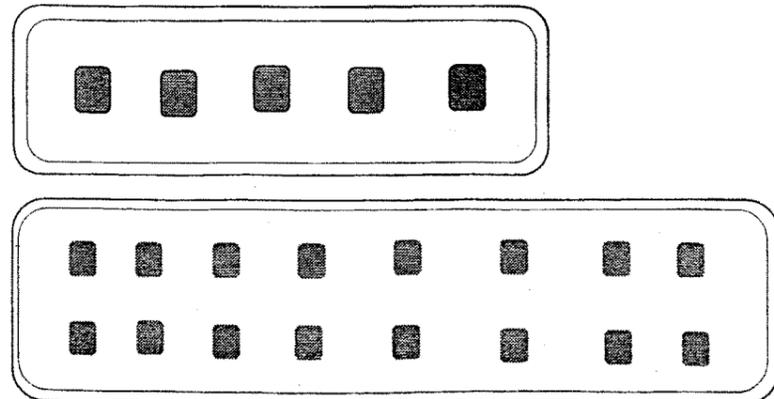


下層遺構分布図

縮尺1/200

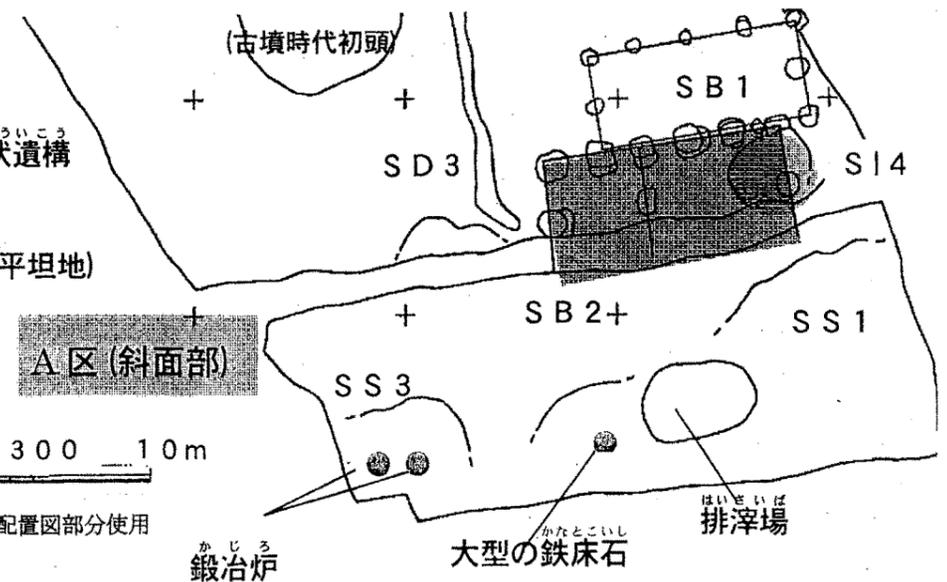
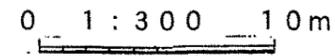
参考：官営鍛冶工房概念図

安間拓巳「古代の鍛冶遺跡」『製鉄史論文集』2000年をもとに作成



- SB: 掘立柱建物跡 (ほったてはしらたてものあと)
- SI: 竪穴住居跡、または竪穴状遺構 (たてあなじゅうきょあと または たてあなじょういこう)
- SD: 溝状遺構 (みぞじょういこう)
- SS: 段状遺構 (斜面に作られた平坦地) (だんじょういこう)

A区(斜面部)

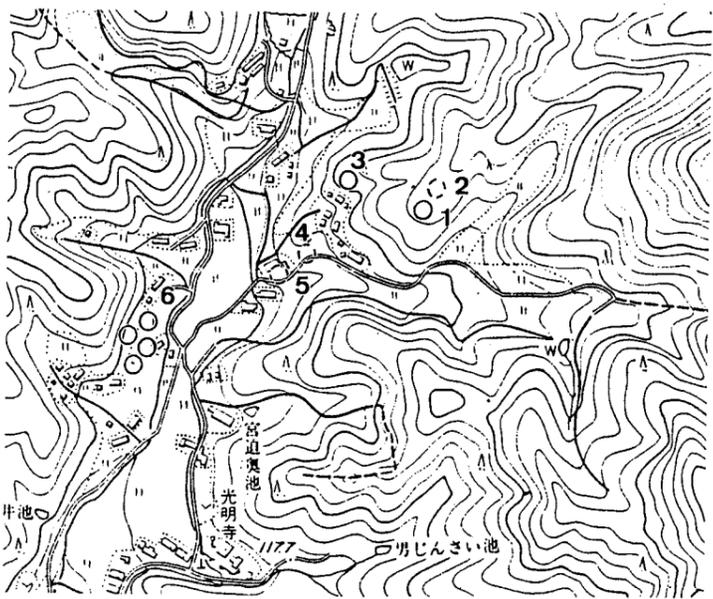
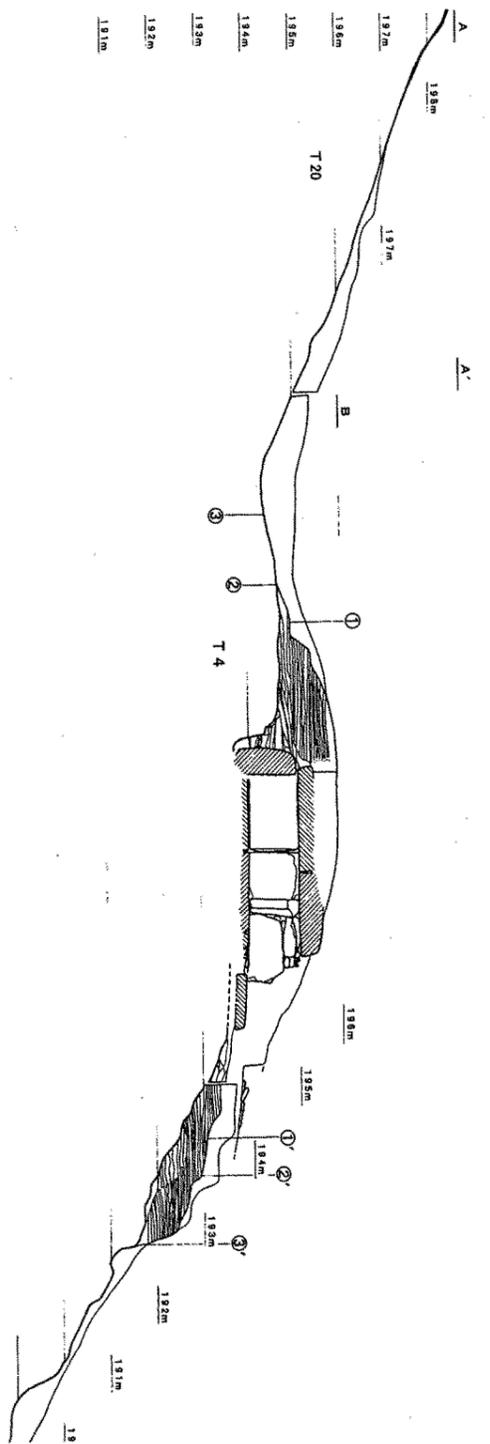
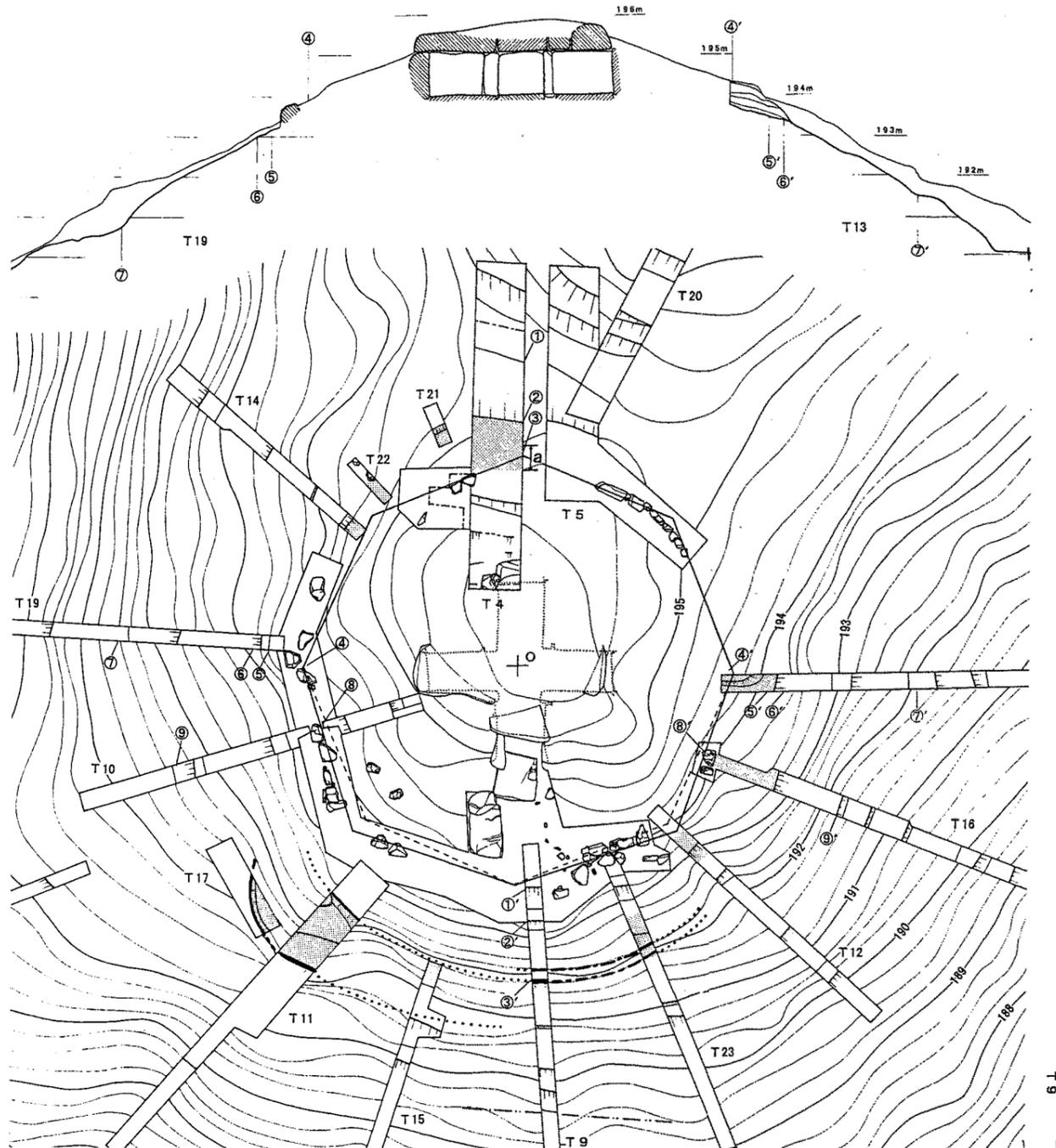


坂長第6遺跡(鳥取県西伯郡伯耆町坂長)現地説明会資料 遺構配置図部分使用  
財団法人鳥取県教育文化財団 岸本調査事務所 2007年6月  
(奈良時代の鍛冶工房跡・会見郡衙に関連する施設として注目される)

### 尾市第1号古墳

#### 〈概要〉

- 所在地 福山市新市町常（芦浦）
- 標高 195.9 m（墳丘頂部）
- 墳形 八角形墳
- 規模 対角 10.7 m
- 時期 7世紀第3四半期頃
- 埋葬施設 横口式石槨3基
- 出土遺物 須恵器杯蓋片、鉄製品（鉄釘など）
- 特徴 花崗岩切石を用いる3基の石槨を凸型に配置し、羨道を含めた平面形が十字形を呈する。石材の接合部、窪みなどに漆喰が残る。



尾市古墳周辺地形図及び古墳分布図（1万分の1）

- 1 尾市1号古墳 2～5 尾市2～5号古墳
- 6 芦浦(吉津)古墳群(現存4基)

五寸、奥行六尺でそこから正三方へ各幅三尺五寸、奥行五尺七寸、高さ七尺の玄室があり側壁は各一枚の切石で接合部は石灰と粘土を混合したもので詰めてあり天井は五個の平石で覆はれており、内部の構造から見ると三四百年前に築いたもので正十字形から推察すれば迫害をうけたキリスト教信者の隠れた教会、若くは密會所とも想像できるが外形、周囲の構造、塚上の樹齢などを総合すると一千七八百年以前の古墳としか信じられない、いづれにしても類例のない珍しいもので歸京後十分研究したいと思つてゐると西村博士は語つた。

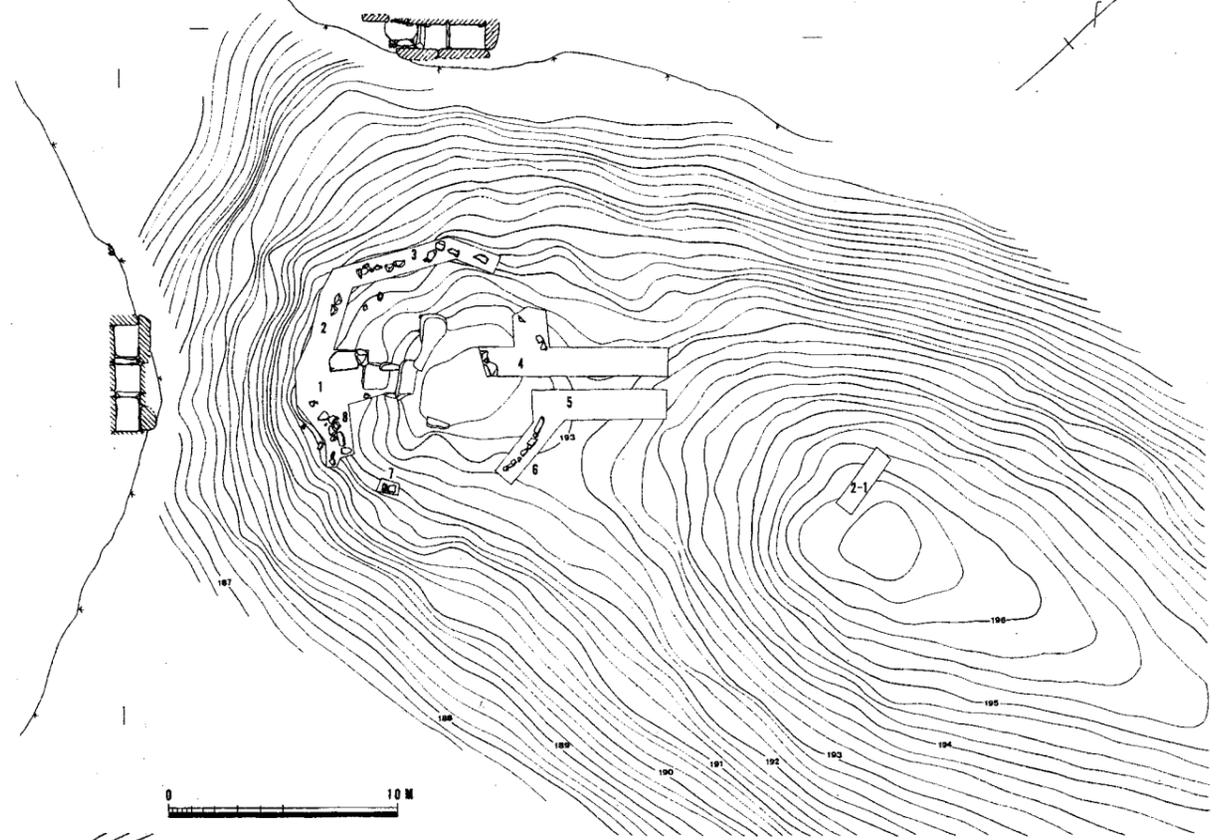
廣島縣産品郡を中心とする蘆田川流域の備後平野における原日本人居住地および古墳を研究調査に來郡中の早大教授西村文學博士は數日前産品郡内の最高峰である蛇園山の支峰、同郡常金丸村大字常小字岡の奥の砂山頂上でわが國では未だ発見されたことのない珍しい十字塚を発見した。この塚は真南に入口があり美道幅三尺

廣島縣下に  
珍らしい十字塚  
西村早大教授の発見  
千七八百年前の古墳？  
大阪毎日新聞  
昭和三年十一月廿  
三日發行

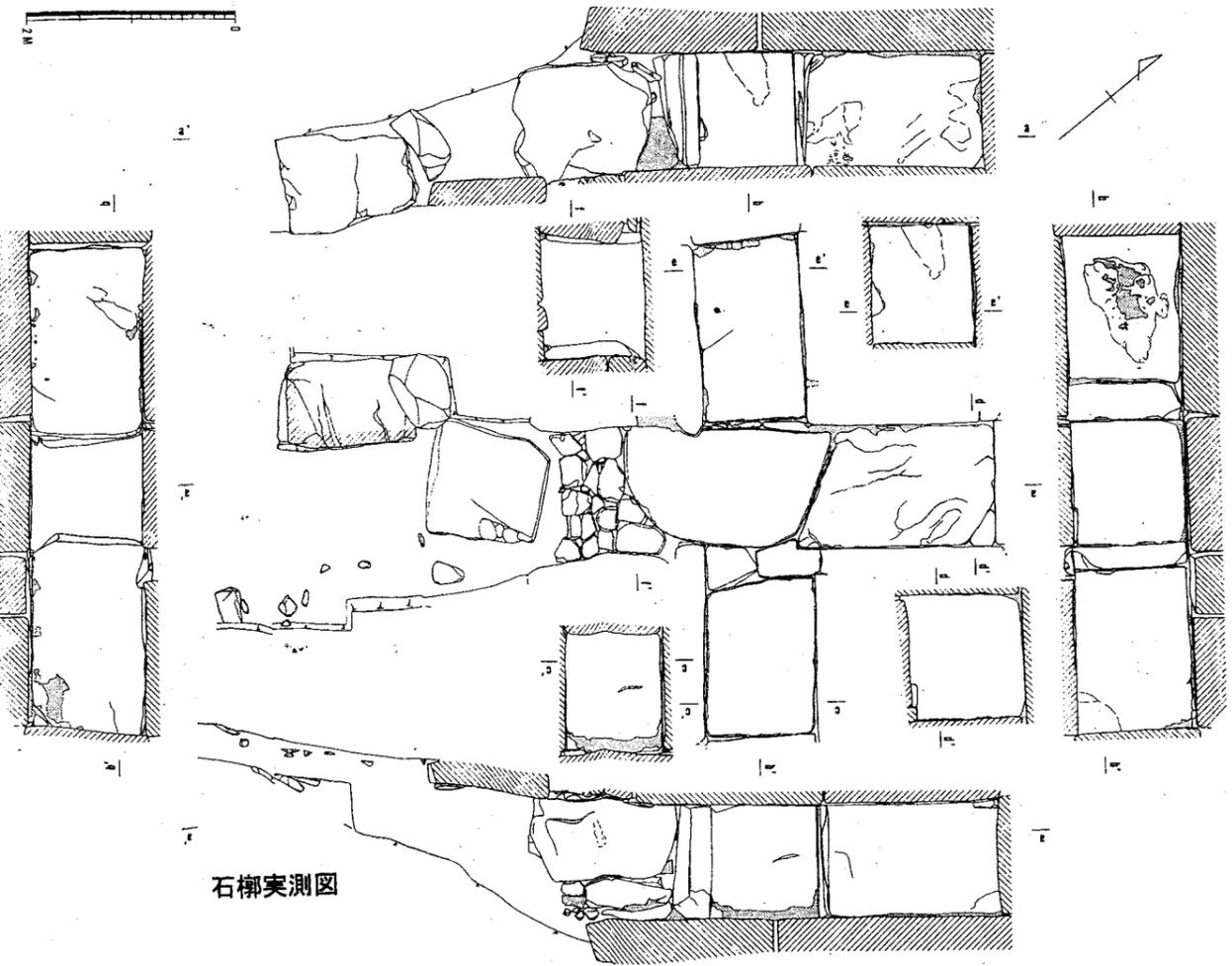
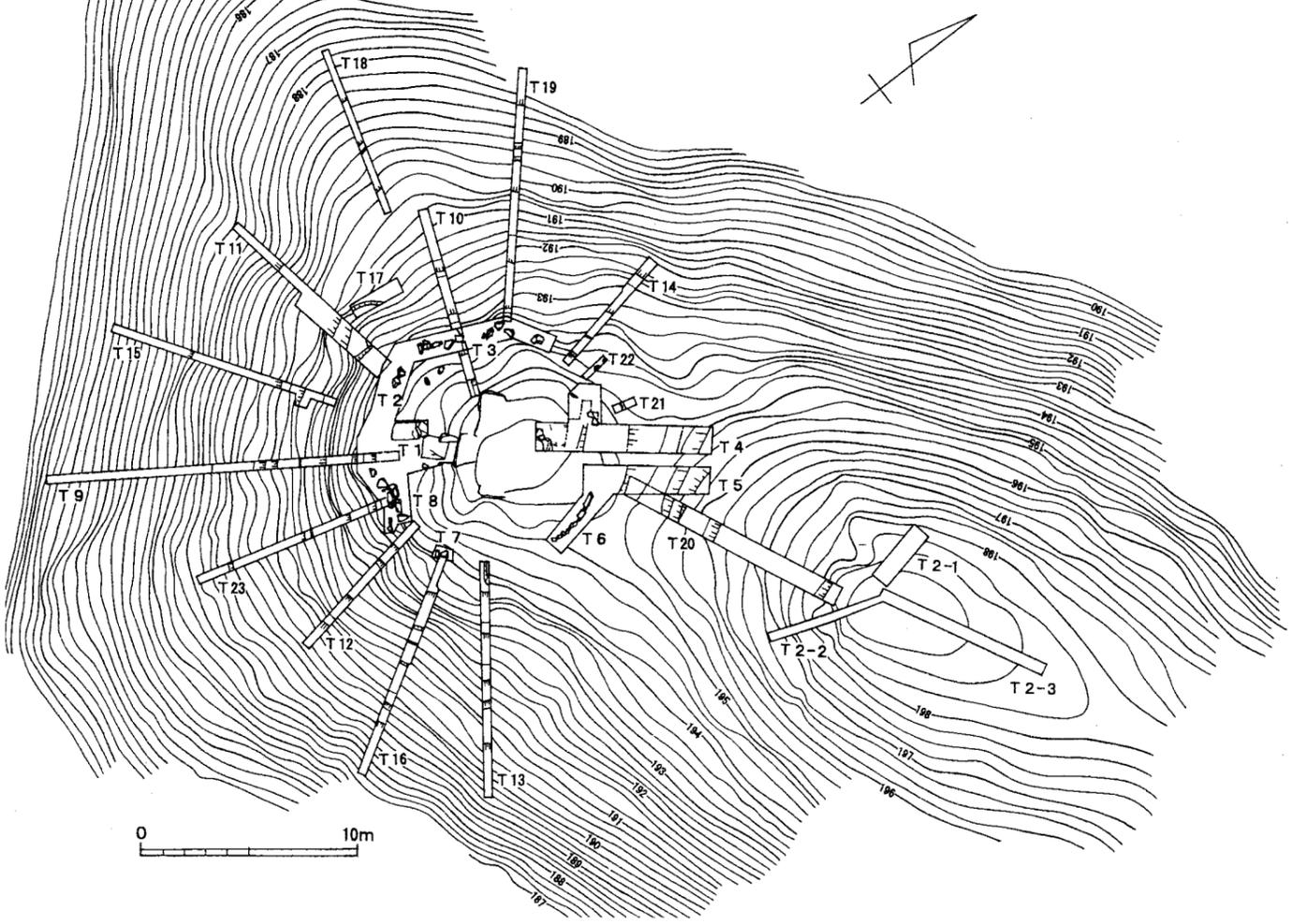
疑質  
常金丸の古塚  
内田正雄  
問者の生地産品郡常金丸村は古の都羅郡に當るも舊記の傳ふるもの稀なり。然れども古塚の存在は夥しく其構造發掘等は稿を改め之を紹介せんも該古塚の年代起源等は稿を改め之を考家の高説を承り度し。傳説には大古火の雨降りし時代の住居さ唱ふるも無論信すべきに非ず。而して現に判明せるは何も宇常部内にして金名(かんな)に三十五ヶ所(後原(あさばら)に二ヶ所(土輪井(しわい)に一ヶ所(蘆浦(あすら)に十四ヶ所(大小精粗區に別れ中には十字型なる異例もあり。御示教を乞ふ

「芦品郡に於ける西村博士第二回史蹟踏査の新聞報道」  
『備後史談』第5卷1号 1929年

尾市第1号古墳 1984年度調査トレンチ配置図



尾市第1号古墳 2002年度～調査トレンチ配置図

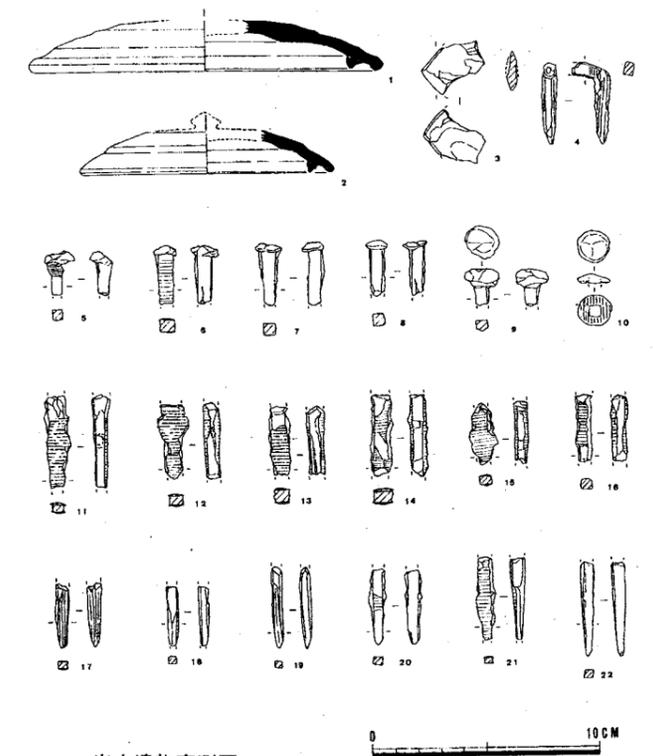
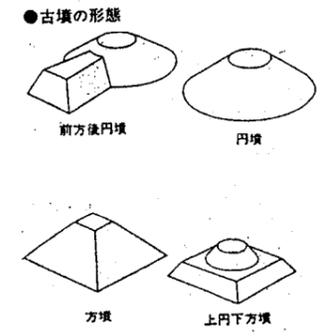


石槨実測図

表. 主体部 各部 計測値一覧

	長さ		幅		高さ
	左側壁	右側壁	奥壁部	入口部	奥壁部
中央石槨	168	161.5	116	115.5	108
東石槨	169	178.5	102	104.5	110
西石槨	172	175	95	94	107
羨道部	406	179	石槨境 98~115		奥106

単位:cm



出土遺物実測図